

【寄稿】

グローバリゼーションと日本語教育

河先 俊子

要 旨

「グローバリゼーション」ということばが近年日本語教育においても使われるようになり、それに対応していくことが求められるようになった。本稿では、「グローバリゼーション」とは何かについて、社会学の領域における4つの議論（ウォーラスティーン、ギデンズ、ロバートソン、トムリンソン）を取り上げて簡単にレビューする。そして、グローバリゼーションの諸相と日本語教育との関係について議論する。そこでは、まず、グローバリゼーションの不平等性を考慮する必要性について述べ、自分が物理的に置かれた場と遠くはなれた世界とを結びつけ、意識を変化させるという点で日本語教育がグローバリゼーションの文化的側面と関わることができることを論じる。

【キーワード】 グローバリゼーション、 ローカル、 弁証法、 文化的経験

1. はじめに

1980年代に重要な概念となった「グローバリゼーション」は、日本では1990年に入ってから知識人によって多用されるようになった（ロバートソン:2）。今日のような「グローバリゼーション」の流行前には、「国際化」（インターナショナル化）ということばが広く使われていたが、これは一つの全体としての世界のもっとも顕著な単位が国民国家であるという仮定を前提としている。また、ロバートソンによれば、「国際化」の概念は、「ある国ないしは何かの共同体が、一つの全体としての世界にもっと参画しよう、もっと影響を与えるようになるようとするやり方に言及するもの」であるという。つまり、「グローバリゼーション」は一つの全体としての世界そのもののあり様に注目する概念であるのに対し、「国際化」は一つの国や共同体と世界全体との関係に注目する概念である。従って、「国際化」は「グローバリゼーション」の一側面であるということもできる。日本語教育の文脈でも近年、「グローバリゼーション」ということばが使われ始め、それに対応していくことが求められているようである。それでは、「グローバリゼーション」とは、一体どのような現象を指すのだろうか。それは日本語教育にどのような影響を及ぼすのだろうか。

「グローバリゼーション」とは様々な側面を持った複雑なプロセスであり、政治学、経済学、社会学などの領域で広く議論されている。ここでは社会学における「グローバリゼーション」に関するいく

つかの説明を簡単にレビューし、それが日本語教育に与える示唆について考察したい。

2. グローバリゼーションをめぐる議論

2.1 世界システム論—ウォーラスティーン

世界を一つの単位として分析したものとしては、ウォーラスティーンの世界システム論を挙げることができる。世界システムとは、複数の文化体(帝国、都市国家、民族など)を含む広大な領域に展開する分業体制であり、周辺の経済的余剰を中心に移送するためのシステムである。このシステム内においては、中心・半周辺・周辺で国際分業体制が成立しており、この点で基本的に経済的不均衡を内在化させている。このシステムは15世紀にヨーロッパで生まれ、資本主義的な生産様式の拡大を原動力として拡大しているとされる。このような世界システム論に対しては、経済的、物質的な要因にだけ目をむけ、文化的な要因は付随的にしか考慮していない（ロバートソン:9）などの批判も多い。しかし、資本主義とそれに付随する消費文化の拡大は、グローバリゼーションの全てではないにしても、重大な側面であることは確かである。

言語に関しても世界システム論を応用したと思われる議論があることから、その影響の大きさを推し測ることができる。ルイ＝ジャン・カルヴェの言語生態学の重層的<中心-周辺>モデルでは、現在の言語の社会的価値や使用の不平等性を前提として、ハイパー中心言語としての英語、標準化された

国家語、群生言語という言語の三層構造が提示されている。そして、グローバリゼーションによって言語が消滅することを防ぐための政策や戦いの必要性が示唆されている。この点、言語生態学から見た時、国家語の教育は、国家語の地位を高める、あるいは保護するための政策的機能を持つことになる。また、言語のメタファーとして通貨が用いられていることから、この議論においては、言語の道具として抽象化された側面が強調されていることが分かる。

2.2 近代性の帰結—ギデンズ

次に、近代性という観点からグローバリゼーションを説明しているギデンズを取り上げたい。ギデンズはグローバリゼーションを「近代性の帰結」として捉えている。近代性とは、17世紀のヨーロッパに起源を持ち、資本主義、産業主義、監視、軍事力という4つの特性をもつ制度である。ギデンズはグローバリゼーションを「ローカルな出来事が何マイルも離れたところで起こる出来事によって決定されたり、その逆が起きたりするといった形で遠く離れた地域同士を結びつける、世界規模の社会関係の強化」であると定義しており、近代性がその原動力となったと捉えている。近代のダイナミズムとしてギデンズが論じるのは、時間と空間の存在論的範疇の変化であるが、それは、時間が午後3時、7時間と表現され地域の個別性から分離した抽象性を持つようになったこと（「時間の空白化」）、相互行為の物理的環境としての現場（ローカル）が、そこから遠く離れたところにある社会的な影響力を徹底的に受けて形成されていくこと（「空間の空白化」）である。この点、近代性とは現場での顔と顔をつき合わせた関係によって結ばれていない、遠く離れた人間同士の関係を許すものと理解される（トムリンソン 2000:97）。ギデンズはこのプロセスを「脱—埋め込み」という概念を用いてそれを説明しているが、「脱—埋め込み」とは「ローカルな相互行為のコンテキストから社会的関係を『引き離し』、無限に広がる時間と空間の中でそれを再構築すること」である。そして、「脱—埋め込み」のメカニズムとして、通貨のような「象徴的トークン」と交通、通信などの「専門システム」を挙げている。一方、ギデンズは、グローバリゼーションの不平等性にも言及しているが、これについては、グローバリゼーションを、近代性がローカルから社会的関係を引き離そうとす

る力に対して、ローカルな行為主体が自己主張をり返すという弁証法的なプロセスとして捉えるべきであると主張している。

このように、ギデンズはグローバリゼーションが個人の生活や経験を変容させる側面を重視していると言える。しかし、トムリンソン(2000:108—109)が指摘するように、制度的なコンテキストの分析に留まっており、精神分析的な文化の分析までには至っていない。この点、ギデンズは文化の概念に対する認識がほとんどなく、コミュニケーションのテクノロジーとしてのみ文化を捉えているという批判を受けている。

2.3 地球文化—ロバートソン

グローバリゼーションを文化的な要因に注目して説明したものとして、ロバートソン、トムリンソンがある。ロバートソンは、ギデンズの議論を、単に「近代性を社会から世界へ拡大したもの」にすぎないとして批判し、グローバリゼーションは、「少なくとも2000年前のいわゆる世界宗教の発祥を同じくらい古い」と主張する^{*1}。ロバートソンはグローバリゼーションが本質的に「世界を一つの統一体として見る意識を強める」ことを強調している。ロバートソンは、国民国家的な諸社会、諸社会の世界システム、個々の自我、人間という4つの要素が、それぞれ自律を保ちつつも、他の3つによって束縛されることによって生じる変容としてグローバリゼーションを捉えている。ここにおいて、個々人もグローバリゼーションのプロセスの一部であり、グローバリゼーションは個人の制度化された再構成を含むとされる。この例として、合理化された社会組織への参入に関する従属的アイデンティティの公認が個人的および集団的アイデンティティの様々なマイノリティの形態を地球規模で確立するのに重要な役割を担ったことが挙げられている。また、ロバートソンは、普遍対個別の対立の問題に関して、グローバリゼーションを個別主義の普遍主義化、及び普遍主義の個別主義化を含む二重のプロセスを制度化する一形態として考察している。

2.4 経験的状況—トムリンソン

トムリンソンは、個人の意味構築としての文化という観点からグローバリゼーションを説明している。トムリンソンは、グローバリゼーションを「複合的

結合性」という経験的状况であると理解し、グローバリゼーションを意味構築のコンテクストを変容させるプロセスとして説明すると同時に、文化によって促されたローカルな行動がどのようにしてグローバルな結果をもたらすのかについても論じている。前者に関して、トムリンソンは「脱領土化」という概念を用いているが、それは、ローカル²から意識や経験を引き離すことであり、例えば自宅にしながら戦争や環境汚染や世界金融市場の規制緩和など遠く離れた場所で起こった出来事に対して感情移入したり、それを実際に自分たちの私生活にとって重要な意味を持つものとして認識したりするという日常的な経験の中に見られる。このような経験は、アイデンティティにも多義的な影響を与えると考えられる。

一方、トムリンソンは、グローバリゼーションが文化的な差異を圧殺し、資本主義文化、西洋文化といった画一的な文化が生まれるという議論に対して、批判的である。その際に、トムリンソンが指摘するのは、弁証法的に抵抗する「ローカル化」の動きであり、現在いたるところで見られる文化の雑種性である。また、普遍主義の問題に対しては、文化は差異のうえに成り立っているわけではないとした上で、文化と普遍性とは対立しないとし、「地球上の全人類の底流に、文化的個性とは関係なく、何か共通の存在条件のようなものがあり、その共通性に基づいて誰もが認める何らかの価値が構築される」ような有益な普遍性も存在すると主張している。

3. 日本語教育への示唆

3.1 グローバリゼーションの不平等性

以上 4 つのグローバリゼーション論を見てきたが、このようなグローバリゼーションの諸相は日本語教育にどのような影響を及ぼすだろうか。

まず、ウォーラスティーンが論じるグローバリゼーションの資本主義の拡大としての側面は、日本語教育に対して学習者の拡大という形で影響を及ぼしており、現在も及ぼしつづけているということができる。日本を中心とした国際分業体制がアジア地域に拡大していったことと、これらの地域で日本語学習者が増えたこととは無関係ではあるまい。また、現在でも就職機会の拡大のために日本語を学習する人が多いことも、日本型資本主義の拡大の影響と言えよう。従って、「グローバリゼーション時代に対

応する日本語教育」と言われる時、その中には日本の経済力の浸透によって増大した学習者に対応するという含まれているように思われる。学びたいというニーズに応じていくという姿勢は正しいかもしれない。しかし、そのニーズは自然に沸いて出たもの、あるいは「日本が好き」というような無邪気さから生じたものではなく、資本主義の拡大という極めて現実的な背景から生まれたものであることに留意しなければならない。そして、そこには経済的な不均衡、あるいは権力関係が潜んでいる。グローバリゼーションの不平等性は全ての論者が指摘しているのであるが、これに目を向けず、単に海外に学習者がいることを理由として、日本語を教えることを無条件に「善」だと考えるのは、戦前、日本の領土の拡大に伴って海外で生じた学習者に対して善意で日本語教育を行っていたこととあまり変わらないのではないだろうか。安易に時代の流れに迎合することは避けなければならない。

グローバリゼーションの不平等性は、アジアの言語の母語話者は日本語を学ぶが、日本語母語話者はアジアの言語を学ぶことはあまりないという現象にも関係があるように思われる。また、日本に移住した日本語非母語話者が日本語を習得しても母語を失ってしまうという現象もある。これに対しては、日本語の優勢を歓迎するものとマイノリティ言語の保護を主張するものとのイデオロギー的な分裂に陥るのではなく、文化の画一化の問題に対してギデンズとトムリンソンが指摘する、グローバルに対するローカルな抵抗という弁証法的なプロセス、ロバートソンの個別主義の普遍主義化及び普遍主義の個別主義化に関する議論を参考にして対応することができるだろう。つまり、日本語教育において、日本語の言語学的、社会言語学的規範に学習者を同化させることに重点を置くのではなく、学習者がそれを批判的に観察し、母語の規範との関連において独自の様式を作り出していくプロセスに重点を置くことである。ここにおいて、教師は日本語の社会的適切性を固定化し、持続させる役割を果たすのではなく、個別のバリエーションを作り出す役割を果たすことになる。ここでは、「日本語」は日本語母語話者が所有するものではなく、使用する人全てのものであるということが前提とされなければならない。

3.2 グローバリゼーションの文化的³な側面

一方、ロバートソンが「自己の言動を世界と結びつけて考える」と主張していること、ギデنزが「脱一埋め込み」ということばで、トムリンソンが「脱領土化」ということばで説明する、ローカルを超えて社会的関係を拡大させる制度やそれがアイデンティティといった心理的な状態に影響を及ぼすことは、日本語教育にどのような示唆を与えるだろうか。結論から言えば、外国語教育は、ローカルとそこから離れた外の世界との結合性を深め、ローカルと個人の文化的経験との絆を弱めるという点において、グローバリゼーションのプロセスを促進すると考えられる。学習者は、メディアや情報通信テクノロジーの発達に伴って、既に多くの世界に関する情報を得ているが、日本語教育を通して提供される情報は、それを補強し、あるいは修正すると考えられる。また、学習者は、日本語の修得によって日本語で発信される情報を自ら検索し、摂取することができるようになる。このようにアクセス可能な外の世界の情報量が増えることは、学習者と外の世界との関わりを深め、学習者の文化的経験をローカルから切り離すと考えられる。しかし、もっと重要なのは、外国語教育を通して、単にメディアを通して情報を得るだけの経験とは、質的に異なる経験も提供できることである。

メディアを通じた情報は、ある特定の価値観やイデオロギーによって歪められている可能性がある。また、トムリンソンがマクルーハンやジョン・トンブソンを引用して指摘するように、テレビの内容がどのようなものであっても、視聴者は実際に起きている出来事の痛さや熱さから隔離された状態で映像を見ているのであり、テレビで見る出来事に直接介入することができないという限界がある。この点、テレビはローカルな空間を外の世界から守るという機能も持つ。さらに、視聴者は与えられる経験全てに等しく関与するのではなく、自分に関係があると認識される経験にのみ関与する。従って、世界に関する情報にメディアを通してアクセスできるようになったということは、人々を意識において世界から遠ざけたり、かえって自文化中心的に考えるようにさせたりする可能性もある。しかし、日本語教育の場で日本を含む他の世界に関する情報を提供する時には、それに介在するイデオロギーに対して批判的に分析し、情報に対して積極的に関与するように促

すことができる。この点、日本語教育が介在することによって、外の世界の情報をより自分に関連づけて理解すること、自分のものにするのを促す、つまりメディアを通じた経験を個人化することができるのではないだろうか。

例えば、韓国では、関心を持つか持たないかは別として、日常的にテレビを通して日本に関する情報に接することがある。また、日本製の電気製品を購入し、日本企業が製作した映画やドラマを鑑賞し、日本風のレストランに行き、日本食を食べることもある。また、ある人は、日本で開発された技術を学び、日本の資本が入った会社で働くこともある。これは、顔と顔をつきあわせた関係の中に、実際に顔を合わせる人がいない、直接目にする人がいない物が入り込むことであり、日本の商品や技術が、それが誕生した場から切り離されて、他の場所の文脈において意味づけられることである。また、自分が存在するローカルな場が遠く離れた場所の影響を受けて形成されているであり、ローカルな場が遠い場所と複合的に結びつけられていることを示す。脱領土化の観点から言えば、このような経験は、自分が物理的に置かれたローカルと自分との関係を変化させる経験であり、個人の意識や生活様式を変える可能性があるものである。このような日常的な経験があることを前提として、日本語教育の場で、例えば日本政府が海洋資源保護の目的で密輸船の取締りを強化した結果、日本に入港できなくなったロシアや北朝鮮の船舶が、韓国で蟹を水揚げしているというニュースを扱ったとしよう。このニュースを批判的に読むことによって、日本風レストランで蟹を食べたことがある学習者は、韓国という場（ローカル）における自分の経験を、日本、ロシア、北朝鮮という別の場やそこにいる漁民の生活と密接に結びつけて理解するようになるだろう。また、海洋資源の保護というグローバルな問題を自分の生活と結びつけて考えるようになるかもしれない。そして、このように個人化された理解は、生活様式を変えるという行動面での変化をもたらす可能性もある。このように、日本語教育の場で扱われるような話題は、意図的にも非意図的にも、グローバリゼーションの文化的な側面を促進する可能性があると考えられる。

さらに、日本語教育では日本語を使った対話の経験を、電話やメールなどのメディアを介して、あるいは「顔と顔をつき合わせた相互作用」として促す

ことができる。これは、上述のメディアを通じた経験とは異なった種類のものとして、学習者の経験を豊かにすることができる*4。特に、日本人と直接顔を合わせて対話する経験は、物理的な近さを伴って他者と結びつくという点、肉体的な存在として相手を感じるという点で特殊であると言える。このような経験を日本語教育の場で行うことは、他者との間に親密性を生み出すきっかけにもなり、他者の視点を内在化させるきっかけにもなると考えられる。このような経験がもたらす心理的な変化については、異文化間教育の領域において詳しく論じられているので、ここでは説明しないが、学習者の内面を豊かにし、ひいては他者とともに生きる意識や態度を導き出すものだと思う。

最後に日本語の習得とグローバリゼーションとの関係について述べたい。日本語を習得した結果、学習者は日本語母語話者並びに日本語理解者、日本語文化圏に対して、日本語で発言する機会を持つことになる。発言する内容は、当然、個人化された内容、ローカル性を帯びた内容になるはずである。このような発言が、学習者の個人的な生活環境、ひいては日本語文化圏に与える影響は決して小さくない。例えば、日本語非母語話者が、首相の靖国神社参拝に関する意見を述べることによって、この問題に対する日本人の意識を変えることもありうる。また、性暴力について非母語話者の女性が語ることにより、日本語理解者の女性との間に、国という単位を超えた女性という単位の連帯意識を生むことになるかもしれない。このように考えると、日本語教育の場で、日本語理解者者に対して非母語話者が発言する機会を作ることによって、日本語教育はグローバリゼーションのプロセスに関わることができるのではないだろうか。

注

*1. ロバートソンが文化の中でも特に重点を置くのは宗教である。

*2. ローカルとは相互行為が生じる物理的環境のことであ

る。ギデンズによると、前近代においてローカルは顔と顔をつき合わせた社会的関係に独占されていた。

*3. 「文化」という概念は、研究の目的によって個人の外に存在しているとみなす場合と、個人内にあるとみなす場合がある(細川)。トムリンソンは厳密に定義しているわけではないが、ここでは「文化」を個人の認識として論じている。

*4. ジョン・トンプソンは、メディアによって生成される相互作用を、①顔と顔をつきあわせた相互作用、②電話やメールなどメディアを通じた相互作用、③マスメディアを通じた擬似相互作用の3つに分類している。

参考文献

- 倉地暁美(1992)『対話からの異文化理解』勁草書房
倉地暁美(1998)『多文化共生の教育』勁草書房
細川英雄(2002)『日本語教育は何を目指すか 言語文化活動の理論と実践』明石書店
ルイ＝ジャン・カルヴェ(2000)西山教行訳「母語・国語・国家語 言語生態学の重層的〈中心・周辺〉モデル」三浦信孝編『言語帝国主義とは何か』藤原書店
Giddens, A. (1990) *The Consequence of Modernity*. Cambridge: Polity Press (松尾精文、小幡正敏訳 1993『近代とはいかなる時代か? : モダニティの帰結』而立書房)
McLuhan, M. (1964) *Understanding Media: The extensions of man*, London: Routledge and Kegan Paul
Robertson, R. (1992) *Globalization: Social theory and global culture*, London: Sage (阿部美哉訳 1997『グローバリゼーション: 地球文化の社会理論』東大出版会)
Thompson, J. (1995) *The Media and Modernity*, Cambridge: Polity Press
Tomlinson, J. (1991) *Cultural Imperialism: A critical introduction*, London: Pinter (片岡信訳 1993『文化帝国主義』青土社)
Tomlinson, J. (1999) *Globalization and Culture*, (片岡信訳 2000『グローバリゼーション 文化帝国主義を超えて』青土社)
Wallerstein, I. (1974) *The Modern World System*, New York: Academic Press (川北稔訳 1987『近代世界システム』名古屋大学出版会)

かわさき としこ/フェリス女学院大学 留学生センター
kawasaki@ferris.ac.jp